

今回、野口医学研究所のプログラムにより春休みに 1 週間ハワイ大学に行くことが出来て、たくさんのことを学び、本当に良い体験となりました。ここで書面ではありますがこのような貴重な体験をさせていただいた野口医学研究所の皆様には心から御礼を申し上げると共に、ハワイで出会ったたくさんの友達、そして支えてくれた友達や家族に心から感謝したいと思います。

今回のプログラムで得られたことはたくさんありますが、特に良かった点はアメリカと日本の医療の違いを実感できたということです。アメリカと日本の医療は違う点がたくさんあります。例えば、総合診療。アメリカでは家族にそれぞれホームドクターがいて、彼らがまず、問診や身体所見をとって診断をつけます。ところが日本では最初から細分化された科の先生に患者さんは見てもらい、身体所見は取るものの、レントゲンや CT を気軽に撮る傾向にあります。日本の病院は CT やレントゲン撮影機が小さい病院にさえ行き渡っていて素晴らしいことだとは思いますが、医療費が高額になってしまうという欠点があります。しかしホームドクターがいれば、重症な病気を除いて、家族一人一人の健康管理ができるので医療費があまりかからないというメリットが有ると思います。しかし、日本の医療は国民皆保険のおかげでとても安くすみませす。逆にアメリカでは簡単な治療でさえ高額請求されてしまうということがあります。日本は医療が進み、とても素晴らしい環境下だと思います。だからこそ、日本ではあまり広まっていない家庭医という概念を学び、いずれそれを日本で生かしていけるのではないかと考えられたことが、一番ハワイで良かった点ではないかと思ひます。

次に素晴らしい友達と出会えたことが何よりの貴重な体験になったと思ひます。今回のハワイで出会った友だちは皆自分の将来設計をしっかりと持ち、突き進んでいる人たちばかりでした。私も漠然と将来の夢はあったものの、友達の将来の夢を聞いて刺激を受けると共に、彼らと日本の医療に貢献したいと強く思える様になりました。一人の力では出来ないことも彼らと一緒になら可能かもしれないと思える友だちが出来たことは本当に良かったと思ひます。また、彼らと勉強会を誘い合って行こうと計画しています。このように切磋琢磨できる友だちが出来たことは、他のプログラムでは得られない経験だと思ひます。

また、日本にいていつも当たり前のように接する友達や家族がいかに大事かを学びました。海外で大変なことが起きた時に、連絡を必死で取ってくれた友達、寂しい時に時差を気にせず話し相手になってくれた友達、そして笑顔で送り出してくれた家族。今回、ハワイに留学する機会を作ってくださった野口の方々もちろんのこと、今まで支えてくれた周りの人達にも心より感謝したい、と思えたことも、留学を経験してのことではないかと思ひます。本当にありがとうございました。今回の機会を生かして、将来自分の道に進めるように更に努力して行きたいと思ひます。

ワークショップレポート

北海道大学 5年 吉田拓人

今回、私は2013年3月3日から8日までの一週間 John A Burns School of Medicine (JABSOM)で行われたワークショップに参加しました。この期間は、自分の大学はまだ春休みではなく、ワークショップ参加にあたって大学の教授に相談し実習を休み、かつ短い春休みの間にその分再実習をしなければならない条件が付いてしまいましたが、それでも自分は一度もアメリカの医療現場や教育現場を体験したことがなく、そのような機会も数少ないと思いワークショップへの参加を決意しました。

ワークショップに参加する前に何を目的にするかということが少し考えてみました。ワークショップの期間は、たかだか一週間です。ハワイに行く前に、自分の周りの人に一週間だけハワイで研修をする話をしたときは、そのような短期間で参加して何の意味があるのかといった質問を何度か投げかけられました。短期留学というと一か月くらいの期間で何かしら身に着けて帰ってくるというイメージがあり、そういった目的で参加を考えた場合、参加する意味がないといった疑問を持つのももつともだと思います。しかし、自分が本格的に臨床留学についていろいろ調べ、医学交流セミナーやその他の臨床留学のセミナーに参加することでわかったことは、一般にアメリカのメディカルスクールに通う学生は、日本の同じ学年の医学生よりも臨床能力が高いこと、アメリカの一年目のレジデントは日本の初期研修を終えた医師と同じくらいの実力を持っていることです。そこで、私は、アメリカのメディカルスクールの学生やレジデントはどういった教育を受けているのかということに興味を持ち始めました。一週間では、医学の知識としては増えなくても、アメリカの教育の実感を体感することでいい刺激になるはずと思ったのです。なので、今回は勉強ではなく刺激を求めてワークショップに参加したというのが本心であります。

少し前置きが長くなりましたが、ワークショップには、日本と韓国から約35名の医学生が参加していました。やはり知らない人同士なので最初は少し緊張していましたが、ワークショップが始まる前日にオリエンテーションと懇親会があり、その場の雰囲気打ち解けるのにそう時間はかからなかったと思います。韓国からは3名だけの参加でしたが、アメリカだけでなくアジアの国でどのような医学教育がされているかを知る機会にもなり、積極的にかかわってよかったと思います。

ワークショップの内容としては、その日その日でテーマが決まっていた、たとえば“shortness of breath”という症状がテーマの日では、まず最初にグループディスカッションでどのような問診をしていくかを考え、その後実際にペアで問診の練習をし、身体診察の練習をし、最後に模擬患者に対して問診から身体診察までの一連の流れを練習するといった内容でした。模擬患者に対する診察は、何人かが代表してビデオでのフィードバックがありました。身体診察の内容や患者への配慮といった点では、日本では習わなかったも

のなども含まれていて、勉強することを主目的にしていなかったものの、身体診察の奥深さを感じました。ワークショップの最後の方ではPBLも行いました。PBLは大学ではあまりやったことが無かったのですが、患者さんの大まかな現病歴が紹介され、それに対してどのような問診や検査をしていくかをディスカッションするもので、周りには3年生や4年生もいましたが、決して単純で簡単な事ばかりではなかったと思います。実際にディスカッションをすることで症状に対する鑑別疾患などの理解が不思議と深まっていく感覚がありました。そして、ワークショップの内容として最後に付け加えておくべきと事としては、Dr.Sakaiのmorning storyです。毎朝、Dr.Sakaiが面白い話をしてくれるのですが、三日目と四日目には二人の学生がmorning storyに挑戦していました。このように人前で話をするのも日本には馴染みのない特徴だなと思いました。

ワークショップの内容は、初めて見たときは5年生には少し簡単な内容かなと思っていましたが、それでも参加する意義はやはり大きかったと思います。理由の一つ目は、参加する目的であった、アメリカの教育を体験できたということです。メディカルスクールでの講義は、授業から実践までが一つの流れとして勉強でき、PBLでは、実際に医師として働くときに必要になってくる能力を鍛えていけると思い、大学の一方的な講義よりも実践的であると思いました。しかし、今回の最も大きな収穫としては、同じ目標を持つ意識の高い医学生とたくさん知り合えたことにあると思います。参加している医学生の中には、海外で生活していた経験を持っていて英語を話せる人、海外で生活した経験が無くても英語が話せる人、USMLE step1をすでに取得している人、三年生から留学を見据えてワークショップに参加している人、海外の病院の見学をしている人など本当にいろいろな学生がいました。臨床留学については、人それぞれ意見があるとは思いますが、それに向けてUSMLEへの勉強や英語のトレーニング、情報収集のためのセミナー参加など多大な努力をしないといけないと思います。しかし、勉強や英語は自分にしっかり返ってくるものだと思いますし、何よりこのようなワークショップやセミナーに参加することで全国に散らばる自分と同じ目標を持つ医学生とたくさん知り合うことができ、自分にとってものすごく刺激的なものであります。学生生活は残り一年となりましたが、今回のワークショップを経て、さらにたくさんの事を挑戦していきたいと思いました。

最後に、このような機会を与えてくださった野口医学研究所の先生方、担当者の方々、ハワイ大学の先生方、コーディネーターの方に心から感謝したいと思います。ありがとうございました。

UHでの実習レポート

群馬大学五年 坂井雄貴

今回、野口医学研究所から University of Hawaii, John A. Burns School of Medicine での Clinical Reasoning Workshop に参加する機会を頂いた。五日という短い期間ではあったが、非常に密度の濃い研修であった。

私は将来家庭医療に携わりたいと思い、日本ではあまりメジャーでない家庭医療を学ぶには海外での研修がいいのではないかと考え、臨床留学に興味を持っていた。しかしなかなか具体的なイメージがわからず、何かきっかけがつかめればと思い、このワークショップに参加させて頂いた。

このワークショップでは沢山のことを学んだが、今回得たことは大きく分けて三つある。まず一つ目は、H&P(History & Physical Examination)の重要性である。初日と二日目は、"Shortness of Breath"、"Chest Pain"という非常に common な症状から、グループで鑑別診断を考え、それに合う問診を考えた。その後スキルラボに移動し、胸部の診察の方法を学び、ペアになりシミュレーションを行った。日本の医学部では、症候から鑑別を考える訓練を行う機会が少ない。また、それを引き出すための適切な問診は何か、診察は何かといったことを関連させて同時に学ぶことはなかなか無いため、今回これらを関連させて学ぶことができ非常に勉強になった。また、日本ではあまりやらない診察の練習もあり、米国の身体所見を大事にする医療の姿勢が見て取れた。また、午後には模擬患者を用いた医療面接を行い、撮影された面接のビデオを全員で見てフィードバックを受けた。私はビデオを見られる側で、非常に恥ずかしかったが、優れた問診・身体診察を行うことがいかに難しいかを実感することができた。「もっとはきはきと喋ったほうがいい」「座って患者さんより目線を低く」など、多くの反省点が見つかり、非常にためになった。

二つ目は自分で考えること、積極性の大切さである。四日目に行った Triple Jump では「深部静脈血栓症」「虫垂炎」「腎臓癌」といった疾患の問診・身体所見・検査などを PBL 形式で考えた。PBL では参加している学生が主体となって発言して進行するため、講義のように黙っていて進むことは無い。主体的に考え、積極的に参加していくことが求められる。また、チューターの先生も学生の発言のたびに"Why?"と聞き返してきた。なぜその鑑別を考えるのか。その問診は何を想定しているのか。その検査は何を除外したいのか。常に考えることを要求される。これがまさに臨床の現場で必要とされることであり、非常に刺激を受けた。

三つ目は多くのモチベーションの高い仲間たちである。今回は例年に比べ非常に参加者が多く、なんと三十八名もの大所帯であった。野口から派遣された十名に加え、佐賀、大阪医科、高知、慶應などの提携校を始め日本全国からの学生が集まっていた。また韓国の釜山大学からの学生もおり、非常に賑やかな研修であった。はじめはこんなに多くの人とやっつけられるかと不安になったが、それは杞憂であった。ランチを一緒に食べたり、ワークショップが終わると皆でビーチに行ったり、食事に行ったりと一緒に多くの時間を過ごし、今の状況、これからのことを語り合った。USMLE を取っている人や準備を着々と進めている人も多く、また、学年も三年生から五年生と幅広く、お互いに様々な

意見を交換することができた。ここであった仲間たちは全国でも海外へのモチベーションの高い医学生たちであり、今後も互いに切磋琢磨していける仲間と出会えたことは私にとって宝物である。

今後医学生として、医師として、どのように自分の目指す医師になるための下地を築いていくか。改めて考えさせられた非常に有意義な五日間であった。今回お世話になった JABSOM の皆様、このような素晴らしい機会を設けてくださった野口医学研究所の皆様にご心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

以前から海外での医学留学に興味があった私ですが、なかなか積極的になれない自分がありました。5 年生の夏前に米国に臨床留学の経験のある父から野口医学研究所の存在を教えてもらい、7 月の三連休に勇気を出して医学交流セミナーに参加してみました。結果から言うとセミナーへの参加は本当に正解で、自分と同じく医学留学を目指す全国の学生と生活を共にすることで大きな刺激を受けました。その経験がとても有意義なものだったので、是非冬のセミナーにも参加して 1 週間の海外臨床研修プログラムに応募しようと思っていましたが、残念ながら自大学の海外研修の選考に落ちてしまい、何としてでも海外で医学を学んでみたいという思いが一層強くなってこのプログラムへの応募を決意しました。

今回の研修プログラムを通してわかったのは、日本の医学教育と米国の医学教育が根本的に違うということです。日本の医学教育も最近はやり実践的な方向へ進んでおり、私の大学の臨床実習もより研修医に近い内容をやらせてもらえるようになっていますが、全体的に見てみるとまだまだ詰め込み教育という実態から抜け切れていない気がします。講義で一通りの知識を詰め込んで、国家試験合格を目指す教育。実習で病院に行っても見学するだけで何もやらせてもらえない。確かに一学生に様々な責任を負わせることができないのは事実ですが、身を持って体験することにより将来のためになる手技を身につけることができると思います。米国の医療とそのまま比較するのは無理がありますが、米国の医学教育では医師になる前に学生に様々な経験をさせます。今回 1 週間お世話になった JABSOM でも 1、2 年生の内から学生自身で考える PBL 教育、腹腔鏡手術やマネキンを用いた模擬診察など、将来の仕事に直結するような内容を教えていて、このような環境で勉強できるのは非常に羨ましいと感じました。また、3、4 年生になると実際に病院で実習を行い、日本での初期研修医とほぼ同じ内容を行うらしく、医学教育の差をひしひしと感じました。日本の医学教育をそっくりそのまま米国と同じ方法にするのは無理ですが、少しでも近づけるように変えていってほしいと思いました。

また、今回は医学の勉強だけでなく、どのような医師になるべきかを町先生に教えていただきました。町先生の考える医師として必要な 6 つの能力(6 competencies)の講義にはとても刺激を受けました。今後の人生でも 6competencies(Patient care、Medical knowledge、Practice-based learning and improvement、Interpersonal and communication skills、Professionalism、System-based practice)を忘れずに勉強していきたいとします。

さらに、今回の研修で良かったのは、同じ目標を共有できる友人を得られたことです。全国の将来米国医学留学を目指す医学生が一同に集まり、1 週間同じ教育を受けることは今後の人生でそうそうないことだと思います。様々な友人と会話することで、自分のモチベーションも高まり、より一層米国で医療をしてみたいという思いが強くなりました。今回出会った友人たちとは一生の友であり続けたいと思います。

最後に、今回このような有意義なプログラムに派遣してくださった野口医学研究所の皆様、JABSOM のスタッフの方々、先生方に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

今回のワークショップは自分にとって実りのあるものとなった。ワークショップを通して学んだものの中で、自分にとって最も重要なものはやはり他のワークショップ参加者とのコミュニケーションの取り方であろう。

ワークショップ参加者の中には自分とは全く違う考え方のバックグラウンドをもった学生で溢れており、普段同じ大学の学生と話すのとはまた別の良さがあった。またそういった新しい考え方を知ることが新鮮で、自身の人生観やアメリカ留学への考え方などに大きく影響を与えた気がする。このワークショップを通して知り合った仲間のうち一部はこれからも連絡をとりあって親交を深めていくと思う。人生の宝である。

ワークショップの中で特に印象に残ったものは、やはり **triple jump** と呼ばれる **PBL** ワークショップである。ハワイ大学は **PBL** に重点を置いていることで有名で、実際のカリキュラムでは週の大部分を **PBL** の時間で占めている。私の通っている名古屋大学でも **PBL** は導入されているが、最大の違いはチューターの積極的関与であると感じた。もちろんこれに対しては賛否両論あるだろう。私の大学では、積極的な関与は学生の自主的な学習意欲やアイデアを損なうとされ、チューターはたまにアドバイスをする程度の傍観者に過ぎない。ハワイ大学での **PBL** ではチューターが患者の役をやり、そこに色々な質問をしていくことで情報を引き出すという形式であった。個人的にはこのワークショップで体験した形式の **PBL** の方がうまくいくと思う。やはり、初めての **PBL** では自分から様々なアイデアを出していくのは難しいし、ファシリテーターの役割がいることでより一層新しいことを学べると思う。個人的には、学生の自主性を重んじるならば、オプションな **PBL** を別にやればよいのではないかと思う。いずれにせよ、このような **PBL** を 1st year から学べる機会があるハワイ大学は正直言って羨ましかった。

このワークショップで良くなかった点を挙げるとすれば、四年生以降のものにとってはワークショップの内容自体は簡単すぎたことだ。

physical exam なども日本で学ぶものとあまり違いがなく、日本ですでに学んだものにとってはちょっと物足りなく感じてしまうかもしれない。だが、忘れかけているものを復習できるという点では素晴らしいワークショップであった。

また、**majority** が日本人であるため、英語をあまり使わなくても済んでしまうことが問題であると感じた。普段の生活でも売店で英語で話しかけても日本語で返ってくることもしばしばあり、無理にでも英語を使い

続けようという野望は初っ端で打ち砕かれた。ただ、参加者の中に他のアジアの国からの学生もいたり、ハワイ大学の学生とも話す機会もあったし英語でコミュニケーションをとる機会が少ないわけではない。周囲の惰性に打ち勝って実際に使い続けることも可能であり、そういったことでも参加者の積極的参加能力が試されているのであろう。まさにアメリカ式である。今後参加する学生へのアドバイスとしては、日本で英語力とコミュニケーション能力を磨いて、他のワークショップ参加者と楽しくハワイを満喫するのが一番ではないかと思う。

最後に、この場を借りて、現地でお世話になった町先生や **Dr.Sakai** をはじめとする先生方、このような機会を自分に与えてくださった野口の皆様に感謝の意を表明したいと思う。ありがとうございました。

UHでの実習レポート

上垣 里紗

私は今回、野口医学研究所を通じ、ハワイ大学 John A. Burns School of Medicine での Learning Clinical Reasoning Workshop に参加する機会をいただきました。

私は以前から留学に興味をもっていました。このような海外での研修に参加するのは初めてで、今回のワークショップをとっても楽しみにしていました。

研修では、ケーススタディ（息切れ・胸痛）における問診や身体所見の取り方、救急患者に対する心肺蘇生法、禁煙指導の仕方や悪い知らせの伝え方などを教わりました。

ハワイ大学での授業では、実際の臨床場面を想定、想像しながら、次に何をしなければならぬか、学生に質問し考えさせながら学んでいくスタイルの授業がとても多かったように思います。また、そこで学んだ症例における問診や身体診察について、すぐに学生同士の練習や OSCE のように模擬患者さんの協力を得て実践的に練習できたことで、理解が深まりました。禁煙指導や悪い知らせの伝え方の学習では、英語で行うのがとても難しく感じましたが、その分、決まり切った質問を並べるのではなく、制限時間内でどのように話を組み立てていくか、表情や言葉の選び方など、普段意識することのないコミュニケーションの細かな部分まで目を向けることができました。

テーマごとの授業の終わりには必ず皆でフィードバックするまとめの時間があり、1つのテーマごとに最初から最後までが一貫したスタイルで、順序立てて学ぶことができました。皆で考え、学び、実践し、そしてそれを楽しもうという空気がどの授業にも溢れていました。

また、研修中には町先生に食事会を開いていただき、アメリカと日本の医学部の違いや、アメリカの医療についての色々なお話を伺うことができました。アメリカでは入試制度によって医学部に多様なバックグラウンドをもつ様々な人が集まること、アメリカの医療にはジェネラルの基盤が浸透していることや、後輩を育てる教育の意識が組織全体に深く根付いていることなど、初めて知ることばかりでとても興味深く、有意義な時間を過ごすことができました。先生の授業で教わった、医師に求められる 6 competencies (Patient care, Medical knowledge, Practice-based learning and improvement, Interpersonal and communication skills, Professionalism, System-based practice) がとても印象に残っています。普段の実習では目の前のことに追われてばかりでしたが、これからはこの 6 competencies を忘れずに、大きな意識をもって臨床実習に臨んでいきたいと思っています。

今回のワークショップは、将来自分が何を学びたいのか、どのような医師になりたいのかということ立ち止まって考えるよい機会になりました。医学英語の知識が不足しており、歯がゆい思いも何度もしましたが、毎日英語で講義を受け、アメリカの医学教育に触れてかけがえのない経験をすることができました。そして、常に積極性を求められることで、もっと自分から発信できるようになりたい、英語力を高めたいと実感した1週間でした。

た。

今回のワークショップに参加して、最もよかったことの1つは、全国からきた医学生と知り合うことができたことです。ワークショップの期間は気持ちいいくらいに晴天続きで、皆でよく学びよく遊んだ1週間は本当に楽しく充実していました。そして、積極的で日本でも普段から色々なことに取り組んでいる皆から、たくさんの刺激を受けました。ワークショップに参加し、このようなつながりができたことを本当に嬉しく思います。今回の研修で学んだこと、感じたことを忘れず、これからも色々なことにチャレンジし、頑張っていきたいです。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった野口医学研究所の皆様、お世話になったハワイ大学の先生方やスタッフの皆様方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

ハワイ大学でのワークショップを終えて

西脇 彩

3月3日から8日にかけて、ハワイ大学医学部（John. A. Burns school of medicine）にて、臨床推論ワークショップに参加させていただきました。参加者は日本全国の医学部と韓国の医学部から40名弱集まっており、学年も様々でした。ワークショップの内容としては、ハワイ大学の先生方によるレクチャー、英語での病歴聴取の練習と模擬患者を用いた実践、そしてシミュレーターなどを用いた身体診察、救急対応のトレーニング、英語でのケースディスカッションなど、幅広く学ばせていただきました。

レクチャーは、ただトピックの解説と知識の整理をするだけでなく、学生をも巻き込んだインタラクティブな内容になっており、とても楽しく参加することができました。内容としても、その後の実習に関連した実践的なものであり、充実していました。例えば禁煙指導の方法などについては実際に行う際の手法についてこれまで大学で習う機会が少なかったため、この機会にきちんと勉強できて良かったと思っています。病歴聴取については、これまでの病院実習にて何度も行ってきましたが、英語での病歴聴取は始めてであったため、ワークショップ参加前はやや不安があったところがあります。しかしながら、病歴の取り方について一通りレクチャーしていただいた後、学生同士で練習する機会もあり試行錯誤しながら学べたため、より深く身についたと思っています。ただし、模擬患者実習では沢山のフィードバックを頂き、さらなるトレーニングの必要性を感じました。

シミュレーター実習もまた、大学で少し経験がありましたが、こちらにきて驚いたのはそのシミュレーターが量質ともに大変充実したものであったことです。これらを用いて腹腔鏡手術の練習や気管支鏡の練習、また基本的な身体所見の取り方や救急時の初期対応など、様々な体験をさせて頂きました。患者さんの前に出る前にこうした形で十分にトレーニングする機会があるのは患者さんにとっても医療者にとっても双方に利益のあることであり、シミュレーター実習の機会が日本でももっと盛んになればと感じました。

ケースディスカッションは、グループに分かれて3つのケースを扱いました。これまでも学生の勉強会などに参加して、ケースディスカッションをする機会があり（日本語、英語いずれも）、とても楽しく学ばせていただいていたので、今回のワークショップでも大変楽しみにしていたところでした。扱った症例はいずれも基本的なものでしたが、グループ内でコミュニケーションを取りながら、また先生ともディスカッションしながら、理論的に考える練習ができました。今後はこういった考え方をより実践的なレベルにまで到達させられるようにするのが目標です。

全体を通して、アメリカ式の医学教育を短い間ではありますが受けられたこと、たくさんの学生と交流できたこと、アメリカとアジアの医療について学べたこと、ハワイの独特な文化に触れられたこと、などたくさんの貴重な経験をすることができました。それにより、医学の勉強になったことはもちろんのこと、ハワイ大学の学生やアジアの学生と触れあうことで自分の医学に対する考え方がより広がりました。そしてまた、さまざまな文化や背景を知ること、今後もより一層幅広い視野と柔軟な考え方をもって医学の道を歩んで行きたいと思うようになりました。

今回受け入れていただいたハワイ大学の先生方、そして様々な面でサポートして頂いた野口医学研究所の皆様には、この場をお借りして深くお礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

2013年ハワイ大学研修レポート

東京医科歯科大学 6年 渡邊 稔之

このたび、野口医学研究所のプログラムで1週間、ハワイ大学 JABSOM (John A. Burns School of Medicine) の CRE ワークショップに参加させていただきました。大変貴重な機会を与えてくださった野口医学研究所およびハワイ大学の関係者の皆さま、一緒にワークショップに参加した参加者の皆さんに感謝申し上げたいと思います。

私にとってアメリカ留学は2回目で、4・5月にボストンに病院実習で滞在した時以来の久しぶりの留学でした。私がこのワークショップに参加させていただこうと思った動機は、アメリカのメディカルスクールではどのような教育が行われているのかということを実際に体験してみたかったということ、久しぶりに英語だけの環境に行きたかったこと、そしてモチベーションの高い日本全国の医学生に会ってみたいという気持ちからでしたが、その3つの目的は全て実現することができました。

ハワイ大学の PBL (Problem-based Learning) 形式の学習スタイルは、実は私のいる東京医科歯科大学でも3～4年生の時の講義に取り入れられています。今回その本場で PBL を体験できることをとても楽しみにしていました。今回のワークショップでは、JABSOM の2年生(日本での医学科4年生に相当)の学生さんがファシリテーターとなり、自分たちが学生として参加したのと同じテーマで PBL を私たちに提供してくれたようでした。PBL では、午後に1時間で調べ物をして、handout を作成したのですが、1時間で英語で調べ物をし、それを英語で Word でまとめるということはかなり時間的に余裕のないものでした。実際に JABSOM の学生さんが調べ物をして handout を作成するときにはやはり4,5時間はかかると話していましたが、私たちの発表が終わった後、JABSOM の学生さんたちが同じテーマに対して作った handout を見せてもらったところ、私たちの数倍の時間をかけて作ったものとはいえ、本当に深く詳細に調べてあり、衝撃を受けました。

初日と2日目には、聴診器を用いて心音や肺音を聴くシミュレーションが行われたり、3日目にはマネキンを使った救急のシミュレーション、内視鏡や腹腔鏡のシミュレーターを使った実習が行われました。私の大学にもスキルスラボというシミュレーターやマネキンが置いてある部屋があり、心肺蘇生のマネキンは使ったことがありましたが、内視鏡のシミュレーターを使ったのは初めてでした。特に腹腔鏡のシミュレーターでは、動く病巣を腹腔鏡の鉗子で突くというゲームがあり、スコアをグループで競いました。このように楽しみながら腹腔鏡の手技を学ぶことができるということは本当に素晴らしい環境だと思いました。

3日目の午後には模擬患者さんに対して10分間で英語で問診をし、身体診察もするという実習が行われました。こういったシミュレーションは、日本では日本語ですらしたことがなく、本当に実践的で勉強になりました。

4日目には、皮下注射、筋肉注射、皮内注射を参加者がお互いに練習し合うという実習が行われました。自分の大学で採血の練習をクラスメイトとお互いにやったことはありません

たが、注射を人に打つのは初めてであり、緊張しました。しかし、教員の先生方の監督下でやってみると、意外とすんなり上手く行くものでした。生まれて初めてする注射が、医師になってから患者さんに対してするものだと本当に緊張すると思いますが、このように医学生のうちにお互いで練習し、自信をつけてから病棟に出ていくことができるというシステムは素晴らしいと思いました。

ボストンで実習していた時にも感じたことですが、アメリカの教育では基本的に学生が自分たちで調べることを推奨し、大学では自分一人では学べないようなこと（実習を含む）が学べるという非常に効率のいい仕組みであるように感じました。また、日本では病院実習といってもいまだに見学型実習が中心であることが多いと思いますが、**student doctor**として参加型実習が行われているアメリカでは、シミュレーショントレーニングなどを通じて、実技を出来る限り練習してから、自信をもって病棟実習に移行できているのではないかと思います。

このように、今回のハワイ大学のプログラムは、日本の医学教育を考えていく上で本当に参考になりました。同時に同じプログラムを受けた他の参加者のみんなと出会えたことが本当に貴重であり、将来私が医師としてどんなことをしていけるのだろうかを改めて考えるきっかけとなりました。どうもありがとうございました。

University of Hawaii JABSOM Workshop 2013

Toshiyuki (Tony) Watanabe, M.P.H.

6th Year, School of Medicine, Tokyo Medical and Dental University, Japan

I have joined the Clinical Reasoning workshop at University of Hawaii JABSOM. I really enjoyed the 4-day program with other participants from many medical schools in Japan. I am very thankful for the staff of JABSOM, Noguchi Medical Research Institute, and other 26 students attending the workshop.

This was my second time studying in the U.S. (first time was clinical clerkship at Massachusetts General Hospital and Brigham and Women's Hospital last April and May). Why I decided to join the JABSOM workshop was because I would like to know the education style of American medical schools, to stay in English-speaking countries to brush up my English skills, and to get to know other highly motivated Japanese medical students. Finally I was able to achieve all of the three objectives mentioned above through the workshop.

Problem-based Learning was introduced to most of medical schools in Japan, and our university (Tokyo Medical and Dental University) now has a curriculum that some subjects of 3rd and 4th year (equivalent to the 1st and 2nd year medical students in the U.S. medical schools) are learned through the PBL style. I looked forward to experiencing the original style of the PBL in an American medical school, and I really enjoyed the workshop. Some 2nd year students worked as facilitators through the workshop, and provided PBL about the same topic which they had also had as students before. It seemed to be a little tough for non-English speakers to do both a search and make a handout about the topic within an hour. After our presentation, JABSOM student facilitators showed us handouts which they had made about the same topic, and they were really high quality even though they spent to make the handout four or more times as many hours as we did.

On 1st and 2nd day we experienced the auscultation simulation of heart and lung sounds, and on the 3rd day we did a simulation of emergency medicine using a mannequin, and used simulators of endoscope and laparoscope. Our university has a simulation room called "Skills Lab", and I had some opportunities to use the CPR (cardiopulmonary resuscitation) mannequin, however, this was the first time for me to use an endoscopy simulator.

On the afternoon of 3rd day, we did a medical interview and physical examination with simulated patients. I have never experienced such a real simulation even in Japanese language.

On the 4th day, we had a practice of subcutaneous, intramuscular, and intracutaneous injections. I had practiced blood drawing with classmates before, however this was the first time to make injections to other people. I felt a little nervous, but it seemed to be easier than I had thought. I can imagine that if my first injection were after my graduation and as a doctor, and to the real patients, it must be much more nervous situation. I think that such kind of practice with classmates must be necessary for medical students to have self-confidence before working as a student doctor in the wards.

The American style of medical education is quite different from the Japanese one. In the U.S., medical schools recommend that their students should do a search by themselves, and medical schools should provide something that students cannot learn by themselves including clinical clerkship. I think this education style is very efficient and effective. On the other hand, many Japanese medical schools still have a lecture-based learning style, and students tend to be rather passive.

Moreover, in most of Japanese medical schools (except some including our university), 5th and 6th year (equivalent to American 3rd and 4th year) students experience clinical clerkship in the style of “just observing and doing noting”. In clinical clerkship in the U.S., however, “student doctors” can participate in a medical team, and treat real patients.

Through this workshop, I have made friends with other participants, and they will be my good friends after becoming medical doctors in the future. Moreover, I was able to realize the difference between American style of medical education and Japanese one. I think I can do something to improve the Japanese style of medical education in the future. Thank you very much.

透き通るような空と海に囲まれて

名古屋大学 新五年 布施佑太郎

医と美と友。

野口医学研究所のご支援のもと実現したハワイ大学 JABSOM での研修を通じて感じたり知ることのできた数多くのことの中で特にこの三つにフォーカスを当てて述べさせていただきます。

まずは医について。今回の実習では問診の方法やプレゼンの理論などを含め **Clinical Reasoning** を鍛え模擬患者を相手にする実践練習を積みさせていただきました。トピックは限定されていたため事前に予習していったことが深い理解につながった気がします。また、実習ごとに別のパートナーを組むことによって各々の大学の教育の強みをお互いに教えあうことができ有意義でした。内容的には英語版 PBL と OSCE といってよく、良い復習になったと感じていた同級生、上級生が多く見受けられました。

このような医の知に関するものの他にもう一つ大切な要素を学びました。それは医の心です。**Patient Care** は **Dr. Machi** が挙げられた六つの要素の最初にくる概念であり、アメリカであろうと日本であろうと常にできなければならないものです。教えてくださった先生方は細やかな **Patient Care** を自然にされていてそれは肌で感じられるものであり多くを学ばせていただきました。**Dr. Sakai** の **Morning Story** も医の心に通じるお話が主で大変ためになったと感じております。

私はすぐに臨床実習が始まる身であり、ワークショップでの経験が大学の臨床実習で活かせるよう努力したいと思います。その意味でも四年の終わりにハワイ大学ワークショップに参加できたことは大きな意義がありました。

次に美についてです。今回の実習はおよそ三時前に終了することが多かった上ずっと快晴だったので自然を十分に享受する時間に恵まれました。三月でも温暖で海に入ったりダイヤモンドヘッドに登ったりできてアウトドアを満喫しました。食事は何を食べても美味しく、ワークショップで出会った素敵な友人たちとビーチを前にしたレストランやバーで歓談しながら堪能できたのが思い出深いです。ハワイの美は人についても当てはまります。全く面識のない人たちと国を越えて挨拶し、話をして優雅な時を楽しめたこともリゾートであるハワイならではの美と言えます。

三つ目は実習を通じて私が得ることのできた最高のもの、友について記します。日本全国から集った三十人余りと韓国からの医学生と知り合いになれたのは素晴らしい経験になりました。三年から五年という学年の垣根を超えてお互い切磋琢磨し教えあって伸びていこうとする姿勢の方々に恵まれました。様々な大学からの幅広い年齢層の参加者の中には自分とは全く異なるバックグラウンドを持つ方も沢山いて大変刺激を受け、自分のおかれた状況や将来について思考を深める良い機会になりました。実習の最中や自由時間に語り

合ったり一緒に飲んだりするなかで、意識が高く目標を持って努力している全国の医学生の方々と友達になりこれからも付き合っていけることに喜びを感じています。

最後となりますが、このワークショップに参加することができて心から楽しかったです。厚くもてなしてくださいましたハワイ大学の先生方、**Kori-Jo** さん、一緒に勉強した皆さん、いつも支えてくれる家族、そして今回の素晴らしい機会をくださいました野口医学研究所の先生方とスタッフの皆様、本当にありがとうございました。本実習で培ったものを基にこれからも一層の努力をしていきたいと思えます。

Learning Clinical Reasoning Student Workshop

鹿児島大学4年木佐森永理

3月3日から8日の5日間 University of Hawaii における Learning Clinical Reasoning Student Workshop に野口医学研究所を通し参加する機会を与えていただきました。実際の病院での研修、見学ではなく、ハワイ大学の医学生の教育を行っている施設で英語で医学を学ぶことができました。

今回のような海外での医学の研修は初めてでした。英語が不十分であることに対する不安もありましたが、それ以上にアメリカでの実際の医学教育の現場を知ることができるという期待感がとても大きく楽しみにしていました。研修の内容は期待通りのものであり得られたものも多かったと思っています。その **work shop** で得たことは大きく分けて3つあると考えています。

一つ目は Learning Clinical Reasoning Student Workshop で学べた医学の知識についてです。プログラムの内容は **clinical reasoning skill** に関するもの、症例に対する **physical examination** の仕方、マネキンに対して救急の現場における心肺蘇生法の学習、腹腔鏡、気管支鏡のヴァーチャル実習、模擬患者に対する問診・身体診察、禁煙の指導の仕方、悪い知らせの伝え方など多彩で非常に幅広く学ぶことができました。

Clinical reasoning learning は、鑑別診断を頭にあげて、何を問診していき、どのような検査をオーダーするべきかどう治療するべきかといった講義でした。先生の説明はとても分かりやすく、学生も積極的に発言し、刺激的な参加型の講義でした。症例の学習の後はその症例に対する身体所見の取り方を学生同士で診察しあうことで学びました。

これまで私が経験した教育ではそれぞれの疾患に対する疫学、病態、治療法などを疾患を中心として学習していき、一つの症例、症状に対して問診・身体所見を取り、鑑別診断を考えるといったトレーニングがほとんどありませんでした。この **work shop** で学んだことを今後の学習に役立てていきたいと考えています。ここで学んだことは、知識そのものだけでなく勉強の方法を学べたので今後の学習に利用が可能な点が素晴らしかったです。

二つ目はこの **work shop** は医学の知識だけでなく、医師としてどうあるべきか、医学教育とはどうあるべきかといったことを考える機会となった点です。

町先生がされた医師の art 面の重要性のお話や鈴木先生の医療教育についてのお話を聞き、またハワイの自然や人と触れ合うなかで、医学の science の面以外での点でも非常に得るものがありました。

三つ目は多くの友人を作ることができた点です。この work shop の参加者はすばらしい人が多かったです。楽しい思い出をつくることもできましたし、情報交換の良い場でもありました。なかなか鹿児島には他大学の志の高い生徒と交流する機会がないので非常に刺激になりました。

最後に、このような素晴らしい機会を提供してくださった野口医学研究所の先生、スタッフの皆様、ハワイ大学の先生方に厚く御礼申し上げます。

この度私は野口医学研究所からご支援を頂き、ハワイ大学で開催された **Clinical Reasoning Workshop** に参加させて頂きました。短期間ではありましたが、モチベーションの高い他大学の学生と共にこのワークショップで学べたことは私にとって大変貴重な経験となりました。

日本に帰国した今、この文章を書くにあたり、ワークショップで学んだ事を振り返ってみると、それらを鮮明に思い返すことができます。それは日本にはあまり使用する機会のない言語を用いての実習で、緊張感があったというのも1つの理由なのかもしれません。しかし私はそれ以上に、誰と、どのように学んだかということが大きな要因であったのではないかと考えています。

5日間という短期間のワークショップであったため、新たな知識や手技の量に限って言うならば、この場で得られたものはそう多くはないのかもしれませんが、たとえ既に学んだことであっても、将来への明確なビジョンを持ち、高い志をもった仲間と共に系統的に学べば、より深く、実践的な形で習得できるのだということを身を持って知ることができました。先生方は私達に、患者の視点に立ち、そこから彼らにとって必要なことを彼らの生活背景を考えながら順を追って考え、実行していくことの重要性を徹底して指導してくださいました。そしてこの重要性は、よりよい医療を学び、よりよい医師になりたいと願う学生同士が積極的に意見を交わしながら学んだからこそ、更に浮き彫りになったと私は実感しています。

今回のワークショップで、自分にとって有意義であったことの1つに、志の高い仲間とめぐりあえたということがあると思います。あるものは、医師として海外で働くために、何が必要かを考え、実際に行動を起こし、既に成果をあげていました。またあるものは、多方面への活動に参加し、人としての幅を広げることに積極的に取り組んでいました。彼らと行動を共にすることで、自分に足りないものが浮き彫りにされ、恥ずかしく思う局面も多々ありました。しかし同時に、足りない所を補うべく、色々なことに挑戦し、彼らに負けないように日々成長していきたいと強く思えました。ハワイでの実習を終え、これからまた日々の学生生活が続いていきます。しかし、ただ漫然と学生生活を過ごすのではなく、自分は将来どのような医師を目指し、そしてそのために何をどのように学ぶのか、そのことを自問自答し、積極的に物事に取り組んでいこうと思っています。そうしなければ、今回のワークショップで学んだことはただの経験で終わってしまうと考えています。

今回のワークショップに参加させていただくことで、将来に対する意識がよりよい方向へ大きく変化したと実感しています。このような素晴らしい機会を与えて下さった野口医学研究所の皆様、熱心に指導して下さいましたハワイ大学の先生方、私達が学びやすいように実習環境を整えて下さった **Ms. Kochi**、そしてハワイでの **5** 日間を実りある本当に素敵なものにしてくれたみんなに厚く御礼申し上げます。